

いさましい ちびの仕立屋さん

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

ある夏の朝のことです。ちびの仕立屋したてやさんが窓まどぎわの仕立台したてだいにむかって、いいごきげんで、いつしようにけんめい、ぬいものをしていました。

すると、ひとりのお百ひやくしやう姓せいさんのおかみさんが通りをやつてきて、

「じょうとうのジャムはどうかね、じょうとうのジャムはどうかね。」

と、よばわれました。

この声が、ちびの仕立屋したてやさんの耳に、いかにも気持ちよくひびいたのです。それで、仕立屋さんは小さな頭まどを窓まどからつきだして、

よびとめました。

「ここへあがつてきてくれよ、おかみさん、その荷がからになるぜ。」

おかみさんはおもいかごをかかえて、階段かいだんを三つあがつて、仕立屋さんのところへきました。そして、いわれるままに、ジャムのつぼをのこらずあけてみせました。仕立さんはそのつぼをみんなしらべて、いちいちもちあげては、鼻はなをくつつけてみました。そのあげくのはてに、こういいました。

「よさそうなジャムだね、おかみさん。四ロート（一ポンドの約三十分の一）ばかりはかっっておくれ。なに、四分の一ポンドぐらいあったってかまやしないよ。」

たくさん買ってもらえとばかり思っていたおかみさんは、仕立屋たてやさんのくれというだけをはかってわたしましたが、ぶんぶんおこつて、ぶつぶついいながらいつてしまいました。

「このジャムは、神かみさまがおれにめぐんでくださったんだ。」
と、仕立屋さんは大きな声でいいました。

「これで強い力をさずけてくださるんだ。」

仕立屋さんは戸だなからパンをだしてきて、大きなパンのかたまりからひときれ切りとつて、その上にジャムをぬりつけました。「こいつはにがくはないだろう。だが、食べるまえに、このジャケツをしあげちまおう。」
と、仕立屋さんはいいました。

そこで、仕立屋したてやさんはパンをじぶんのわきにおいて、またぬいはじめました。けれども、うれしいものですから、つい、ぬいたがだんだんあらくなつてきました。

そのうちに、ジャムのあまいおいが、ハエのたくさんとまつている壁かべをつたつていきました。ハエはおいにさそわれて、パンの上にいっぱいあつまつてきました。

「やい、やい、だれがきさまたちにきてくれつていった。」

仕立屋さんはこういつて、よびもしないのにやつてきたお客きやくさんたちを追おつぱらいしました。けれども、ハエたちには、ドイツ語ごなんかわかりません。ですから、追おいはらわれるどころか、だんだんになかまの数をふやしては、なんどもなんどもどつてくる

のでした。

こうしているうちに、とうとう、仕立屋さんしたてやのかんしやくだまが爆発ばくはつしました。仕立屋さんは仕立台したてだいの穴あなから布ぬのきれをつかみだして、

「待つまてろ、こいつをくれてやる。」

と、さけぶがはやいか、そのきれで思いきつてハエをたたきました。

仕立屋さんがきれをとってかぞえてみますと、ちようど七ひきのハエが目のまえに死しんで、手足をのばしています。

「なんて弱虫よわむしなんだ。」

と、仕立屋さんはいって、じぶんのいさましいのに、われながら

感心してしまいました。

「こいつは、町じゆうに知らせてやろう。」

そこで、仕立屋さんはおおいそぎで、帯を一本裁つて、ぬいあげました。そしてそれに、大きな字で、「ひと打ちで七つ」と、ししゆうをしました。

ところが、仕立さんは、

「ふん、町なんかなんだい。世界じゆうに知らせてやるんだ。」
と、いいました。

仕立さんの心臓は、うれしすぎて、まるで小ヒツジのしつぽみために、びくびくうごいていました。

仕立さんはその帯をこしにまきつけました。これから、世の

なかへでていこうというのです。だって、こんなしごと場ばなんか、じぶんのいさましさにくらべれば、あんまり小さすぎますもの。

でかけるまえに、仕立屋さんは、なにかもっていけるものはないだろうかと、うちのなかをさがしてみました。けれども、古いチーズがひとつかけらしか見つかりませんでした。それで、そのチーズを、仕立屋さんはポケットにつっこみました。

町はずれの門のところで、一羽わの鳥がやぶのなかにはいつて、でられなくなっているのを見つけました。これもチーズといっしよに、ポケットにつっこみました。

それから、仕立屋さんは、いさましく、大またに歩いていきました。身みがかるくて、すばしこいので、ちつともつかれませんでした。

した。

そのうちに、道は山へさしかかりました。てつぺんについてみますと、そこには雲つくような大男がすわっていて、いかにものんびりとあたりをながめていました。仕立屋さんは勇氣をだして、その大男のほうへ歩いて行って、よびかけました。

「やあ、どうだね、きようだい。おまえさんはそこにすわりこんで、ひろい世間せけんをながめているってわけかい。おれもちょうどそのひろい世のなかへでていこうってとこさ。運うんだめしでもしようと思つてね。おまえさん、いつしよにいく気はないかい。」

大男は、ばかにしたように、仕立屋さんをじろつとながめて、「きさま、どこの馬のほねだ。みつともない野郎やろうだな。」

と、いいました。

「なんだと。」

仕立屋したてやさんはこういつて、上着うわぎのボタンをはずして、大男にあの帯おびを見せました。

「こいつを読めば、おれがどんな男か、わからあ。」

大男は「ひと打ちうちで七つ」と書いてあるのを読んで、仕立屋さんがうち殺ころしたのは、てつきり人間だと思いました。それで、このちびすけをちつとはうやまう気持ちになりましたが、でもまあ、とにかくためしてやれ、と腹はらのなかで思いました。そこで、大男は石をひとつ手にとって、ぎゆうつとにぎりしめました。すると、その石からしずくがぽたぽたとおちました。

「きさまに力があるんなら、このまねをしてみろ。」

と、大男がいました。

「なんだ、たったそれつきりかい。おれにとつちや、そんなことあ、お茶ちやの子こだ。」

仕立屋したてやさんはこういって、ポケットに手をつつこんで、あのやわらかいチーズをとりだしました。そして、それをぐいとにぎりしめましたので、しるがだらだらとながれだしました。

「どうだい、ちと、おれのほうがうわてだろう。」
と、仕立屋さんはいました。

大男は、なんとこたえていいのか、わかりません。このちびすけに、こんなことができようとは、どうしても信じる事ができ

ません。そこで、こんどは、石をひとつひろって、目ではほとんど見えないくらい高いところまでほうりあげました。

「さあ、ひよっこ野郎やろう、おれのまねをしてみな。」

「うまくほうつたな。」

と、仕立屋したてやさんがいいました。

「だが、あの石は地面じめんへおっこつてきたじゃあないか。おれがいまほうつてみせるのはな、二度ともどつてこやしないんだぞ。」

仕立屋さんはポケットに手をつっこんで、あの鳥をつかむと、いきなりそいつを空へほうりあげました。

鳥は自由じゆうになったのをよろこんで、空へのぼっていききました。

そして、どこともなくとびさつて、二度ともどつてはきませんで

した。

「おい、きょうだい、こんなことでいいのかい。」

と、したてや仕立屋さんがたずねました。

「ちよいとばかしなげるなあ、きさまも。」

と、大男がいました。

「だが、こんどは、きさまにまともなものがかつげるかどうか、ためしてみようじゃないか。」

大男は仕立屋さんを、大きなカシの木が地じべたにたおれているところへつれていきました。そして、

「きさまにほんとうに力があるんなら、おれに手をかして、この木を森のそとまではこびだしてくれ。」

と、さそいかけました。

「いいとも。」

と、ちびさんはこたえました。

「それじゃあ、おまえは幹みきのところをかつぎな。おれは大枝おおえだを小枝こえだごとかつぐからな。なんてったって、こいつがいちばんほねのおれるしごとき。」

こういわれて、大男は幹をかつぎあげました。ところが仕立屋したてやさんは、すましたもので、大枝の上にかしかけました。大男はうしろをふりむくことができせんから、大きな木をまるごと、おまけに仕立屋さんまでもいつしよにかついでいかなければなりませんでした。

うしろにのった仕立屋さんは、まことにごきげんで、陽気なものでした。木をかつぐのなんか、まるで子どものあそびだともいうように、

お馬にのった仕立屋さん

三人そろって町からでていった

と、小唄を口笛でふいていました。

大男はかなりのあいだおもい荷物をひきずっていききましたが、もうどうにもそれいじょうすすめなくなりましたので、

「おい、木をおとすぞ。」

と、どなりました。

仕立屋さんはひらりととびおりて、両腕で木をかかえまし

た。こうして、いままでずっとかかえていたような顔をして、大男にむかつて、

「おまえさんは大きなずうたいをしているくせに、こんな木ひとつ、かつげないのかい。」

と、いいました。

ふたりは、それからまた、いつしよに歩いていきました。やがて、一本のサクラの木のそばをとおりかかりました。すると、大男はじゆくしきったサクラランボのなっている木のとつぺんを、ひよいとつかんで、ひきおろしました。そしてそれを仕立屋したてやさんの手にもたせて、サクラランボを食べるようにいいました。でも、ちびの仕立屋さんでは、とてもその木をおさえているだけの力があ

りません。ですから、大男が手をはなしますと、とたんに木はねかえつて、それといっしょに、仕立屋さんも空へはねとばされてしまいました。

それでも、仕立さんがけがひとつしないで、おちてきますと、大男はいいました。

「なんだ、きさまには、こんなほそい枝えだをおさえているだけの力もないのか。」

「力がないんじゃない。」
と、仕立さんがいいました。

「おまえさん、ひと打ちうちで七つもやつつけた男に、こんなことがものの数にはいるとも思ってるのかい。おれはな、下でりょうし猟師

がやぶんなかへ鉄砲てつぱうをうってるから、ちよいと木をとびこえただけなのさ。おまえさん、できるなら、おれのまねをしてとんでみな。」

大男はやってみましたが、木をとびこすことができないで、枝えだのあいだにひっかかってしまいました。こんなわけで、こんどもまた仕立屋したてやさんの勝ちになりました。

大男はいいました。

「おまえがそれほどいさましい男だというんなら、いつしよにおれたちの岩屋いわやへきて、とまってみろ。」

仕立屋さんは、待まってましたとばかりに、大男のあとについていきました。

岩屋についてみますと、そこには、ほかの大男たちが火のそばにすわりこんで、めいめい丸焼きにしたヒツジを一ぴきずつ手にもって、むしやむしや食べていました。

仕立屋さんはあたりを見まわして、

(こりや、おれのしごと場ばよりずっとひろいや。)
と、思いました。

さっきの大男は、仕立屋さんに寢床ねどこをひとつきめてやって、「それにもぐりこんで、ゆつくりねろ。」

と、いいました。

でも、ちびの仕立屋さんしたてやには、その寢床ねどこは大きすぎました。ですから、仕立屋さんはなかへはもぐりこまずに、ほんのすみっこ

にはいこんでいました。

ま夜中よなかごろ、大男は、仕立屋さんがもうぐつすりねこんでいるものと思いました。そこで、大男はそつとおきあがつて、大きな鉄の棒をてつぼうひつつかみ、それで仕立屋さんのねている寢床をひとつ、ガンとなぐりつけました。そして、これで、あのバツタみたいなちびすけの息の根いきねをとめたつもりでいました。

朝はやく、大男たちは森へでかけましたが、仕立屋したてやさんのことなんか、もうすっかりわすれていました。ところがそこへ、ひよっこり、仕立屋さんがいかにもゆかいそうに、へいきな顔をしてやってきましたので、大男たちはびつくりぎょうてんしました。そして、仕立屋さんがじぶんたちみんなをなぐり殺ころすのではない

かと思うと、こわくなって、おおあわてでにげていきました。

仕立屋さんは、じぶんのとんがった鼻はなのむくほうへ、ずんずん歩いていきました。長いあいだ歩いたのち、とある王さまのお城しろの庭にわにはいりこみました。仕立屋さんは、ひどくくたびれていましたので、草のなかにねころんで、そのままねむりこんでしまいました。

こうしてねているあいだに、お城の人たちがやってきて、四しほう方はっほう八方から仕立屋さんをながめまわしました。そして、帯おびに

「ひと打ちうちで七つ」と書いてあるのを読みました。

「はてと、こんな平和へいわなときに、この大だい力りきの豪傑ごうけつはここでのにをしようというのだろう。」

と、みんなは口ぐちにいいました。

「これはきつと、えらいさむらいにちがない。」

みんなは王さまのところへいつて、このことを話しました。そして、

「もし戦争せんそうでもはじまりますと、これは、きつとたいせつな、役やくにたつ人になると思います。ですから、どんなことをしても、

よそへおやりにならぬほうがよろしゆうございます。」
と、意見いけんをもうしあげました。

王さまも、この忠告ちゆうこくをきいて、もつともなことだと思ひましたので、仕立屋したてやさんのところへおつきのものをひとりやりました。その男は、仕立屋さんが目をさましたら、さむらいになって、

王さまにつかえるようにすすめろ、といいつかつたのです。

使^{つか}いのものは、ねむっている仕立屋さんのそばに立つて、待^まつていました。やがて、ようやくのことで、仕立屋さんが、うんとひとつのびをして、目をあげました。そこで、使^{つか}いのものは、王さまからいいつかつてきたことをもうしでました。

「いや、そのためにこそ、わたしはこの国へまいつたのです。いつでもよろこんで、王さまにおつかえいたします。」
と、仕立屋さんはこたえました。

こうして、仕立屋さんはうやうやしくむかえられました。そして、とくべつの住まいをひとついだけきました。

ところが、ほかのさむらいたちにとっては、仕立屋さんがじゃ

までなりません。みんなは、こんなちびすけはどこか千マイルも遠くへいつちまえばいいのに、とひそかに思っていました。

「いったい、どうなるんだ。」
と、みんなはいいあいました。

「おれたちがあいつとけんかをはじめるとする。あいつが切りかかる。すると、ひと打ちで七人やられてしまう。それじゃ、とてもかなわん。」

そこで、みんなはかくごをきめて、そろって王さまのまえにて、おいとまごいをしました。

「わたくしどもは、ひと打ちで七人もうちたおすような男とは、とてもいっしょにはおられません。」

と、みんなはもうしました。

王さまは、たったひとりのために、ちゆうぎ忠義な家来けらいをのこらずうしなってしまうのをかなしく思いました。そして、

（いつそのこと、こんな男が目にとまらなければよかったのだ。できることなら、ひまをやりたいものだ。）
と、考えました。

でも、王さまには、思いきつてひまをやるだけの勇氣ゆうきもありませんでした。なぜって、もしそんなことをしようものなら、この男が家来けらいもろとも王さまをうち殺ころして、かわりに王さまの位くらいにつきはしないかと、それが心配しんぱいでならなかつたのです。

王さまは、長いこと、ああでもない、こうでもないと考えぬい

たすえ、ようやくうまいくふうを思いつきました。そこで、仕立した屋てやさんのところへ使つかいをやつて、こういわせました。

「あなたが世よにもすぐれた豪傑ごうけつであるのを見こんで、ぜひたのみたいことがある。じつは、この国のある森のなかに、大男がふたり住んでいて、ものはぬすむし、人は殺ころすし、火はつけるし、とにかくひどい悪事あくじばかりはたらいているのだ。この男たちに近づくと、どんなものでも命いのちがあぶない。もしこのふたりの大男をやっつけて、殺してくれれば、王さまのひとりむすめを妻つまにあげるし、国の半はんぶん分ぶんを持参金じさんきんとしてあげよう。なお、馬にのつたさむらいを百人あなたにつけてやって、すけだちさせる。」

（こいつは、おれのような男にとって、やりがいのあるしごとだ

ぞ。

と、仕立屋さんは心に思いました。

(美しいお姫さまと国を半分か、そうざらにあるしごとじゃあないな。)

そこで、仕立屋さんはへんじをしました。

「いいですとも。大男どもは、かならずわたしがやつつけておめにかけます。百人のさむらいはいりません。ひと打ちで七つをやつつける男には、ふたりぐらい、ものの数ではありません。」

ちびの仕立屋さんは、のこのこでかけていきました。百人のさむらいたちは、馬にのって、あとからついていきました。森のはずれまできますと、仕立屋さんはおともの人たちにいいました。

「いいから、ここで待^まっていてくれ。おれひとりで、かならず大男どもをかたづけ^ててみせるから。」

それから、仕立屋^{したてや}さんは森のなかにとびこんで、右や左を見まわしました。しばらくたつたとき、ふたりの大男のすがたが目にとまりました。大男どもは、とある木の下にねころんで、ねむっています。ところが、そのものすごいびきのために、木の枝^{えだ}が上下にゆれていきます。

それを見て、仕立屋^{したてや}さんは、すばやく両方のポケットに石をいっぱいつめこんで、その木によじのぼりました。木のなかほどもでのぼりますと、するすると一本の大枝^{おおえだ}をつたつて、ちようどねむっている大男たちのま上のところまできて、そこにこしをお

ろしました。そして、かたいつぼうの大男の胸むねの上に、石をつぎつぎとおとしはじめました。

その大男は長いこと気がつきませんでしたでしたが、それでもとうとう目をさまして、なかまをつつついて、いいました。

「なんでおれをなぐるんだ。」

「おまえ、夢ゆめでも見たんだろう。おれはなぐりやあしねえもの。」
と、相手あいての男はこたえました。

それから、ふたりはまたぐうぐうねこんでしまいました。仕立屋さんは、こんどは、もういつぼうの大男をめがけて、石をひとつおとしました。

「なにをしやる。」

と、その大男がどなりました。

「なんでおれに石をぶつつけるんだ。」

「おれはなんにもぶつつけやしねえよ。」

と、さいしよの大男がこたえて、なにかぶつぶついきました。

ふたりはちよつとのあいだ口げんかをしていましたが、つかれきつていましたので、まもなくかなおりをして、またまたねこんでしまいました。

そこで、仕立屋したてやさんはまたもやいたずらをはじめました。こん

どは、いちばん大きい石をえらびだして、そいつをさいしよの大男の胸むねをめがけて、力いっぱいぶつつけました。

「なんてえひでえことをするんだ。」

大男はこうわめきざま、気がくるったようにとびおきて、なかまの大男をどんと木のほうへつきとばしました。そのとたん、木はぐらぐらつとゆれうごきました。

相手あいてもおなじようにしかえしをしました。それから、ふたりはいかりくるつて、木をひっこぬいて、なぐりあいをはじめました。こうして、あばれまわったあげく、とうとう、ふたりともいちどきに地じべたにぶつたおれて、死しんでしまいました。

さてそこで、ちびの仕立屋したてやさんは地べたにとびおりました。

「こいつらが、おれののつかつた木をひっこぬかなかつたのは、いやはや、もつけのさいわいというもんだ。」
と、仕立屋さんはいいました。

「さもなきや、リスみたいに、ほかの木へとびうつらなきやあならないとこよ。もつとも、おれみたいなやつは、身みがかかるいからなあ。」

仕立屋したてやさんは刀かたなをぬいて、ふたりの大男むねの胸むねに二度、三度、ずぶりずぶりとつきさしました。それから、馬うまにのつたさむらいたちのところへでていって、いいました。

「しごとはすんだぞ。ふたりとも、おれが息いきの根ねをとめてきた。だが、ちよいとほねがおれたぞ。やつらは、くるしまぎれに木をひっこぬいて、むかつてきたからな。だが、おれみたいに、ひと打ちうちで七つもやつつけるものにむかつちや、齒はもたたん。」

「それであなは、おけがもなさらなかつたんですか。」

と、さむらいたちはたずねました。

「うん、うまいぐあいにいったんだ。」

と、仕立屋したてやさんはこたえました。

「あいつらに、おれの髪かみの毛け一本おらせやしなかつたさ。」

さむらいたちは、どうしてもそれを信じしんようとはしませんでした。そこで、みんなは森のなかに馬をのりいれました。すると、たしかに、仕立屋さんのいったとおり、大男どもが、じぶんたちのながした血ちのなかにひたっています。しかも、あたりには、ひっこぬかれた木がごろごろしているではありませんか。

ちびの仕立屋さんは、王さまから約やく束そくのごほうびをいただくうとしました。ところが、王さまは、まえにした約束やくそくのことを後こ

悔^{うかい}して、どうしたらこの豪傑^{ごうけつ}を追いはらせるだろうかと、またまた考えていたところでした。

「おまえは、わしのむすめと国を半分^{はんぶん}もらうまえに、もうひとつ、いさましい手なみを見せてくれねばならぬ。」

と、王さまは仕立屋^{したてや}さんにいいました。

「じつは、森のなかを（一）一^{いっかくじゆう}角獣^{かくじゆう}がかけまわっておつて、ひどい害^{がい}ばかりしておる。まず、こいつを生けどりにしてもらいたい。」

「一^{いっかくじゆう}角獣^{かくじゆう}の一^{いっかくじゆう}ぴきぐらい、大男^{おおおとこ}ふたりにくらべれば、なんでもありません。なにしろ、ひと打ち^{うち}で七つというのが、わたしの手なみなんですからね。」

こういって、仕立屋さんはなわを一本と、おのを一ちようもつて、森にでかけていきました。そして、こんどもまた、おともの人たちには、そとで待^まっているようにいいつけました。

長いことさがすまでもなく、まもなく、その一^{いっかくじゆう}角^{かく}獣^{じゆう}があらわれました。まるで、その角^{つの}で仕立屋さんをあつさりつきさしてくれようともいうように、仕立屋さんめがけて、まつしぐらにおどりかかってきました。

「しずかに、しずかに。」

と、仕立屋さんはいいました。

「そうあつさりとはいかんぞ。」

仕立屋さんはそこにじつと立って、待^まっていました。けものが

すぐ近くまできたとたん、ひらりと身をかわして、木のうしろへまわりこみました。

一 角獣いっかくじゅうは、力いっぱい木につつかかかっていったものですか、その角つのをぐさつと木の幹みきにつきさしてしまいました。そして、もういちどそれをひきぬく力もなく、そのまま生けどりにされてしまったのです。

「それ、小鳥こどりをつかまえたぞ。」

仕立屋したてやさんはこういつて、木のうしろからでてきました。そして、まず一 角獣いっかくじゅうの首くびになわをかけ、それからおのもつて角つのを幹みきからひきはなしました。こうして、すっかりしまつがついたところで、そのけものをひっぱって、王さまのところへつれてい

きました。

王さまは、こうなつてもまだ約束やくそくのほうびをやるつもりはあ
りません。いよいよ、三つめの注文ちゅうもんをだしました。仕立屋さ
んは、婚礼こんれいのまえに、森のなかでものすぐわるいことばかり
しているイノシシをつかまえなければならぬ、もつとも、それ
には狩人かりゆうどたちに手つだわせるが、というのでした。

「けつこうですとも。」

と、仕立屋さんはこたえました。

「そんなことは、子どもだましみたいなものですよ。」

仕立屋さんは、森のなかまで狩人かりゆうど人たちをつれていきはしま
せんでした。もつとも、狩人たちにしてみれば、そのほうが、あ

りがたかったわけです。なぜって、狩人たちはこのイノシシのためにはもうなんどもひどいめにあつていましたから、イノシシを追いかけるなんてことは、ごめんだつたのです。

イノシシは仕立屋したてやさんのすがたをひと目見るなり、口からあわをふき、きばをといで、仕立屋さんめがけてとびかかつてきました。仕立屋さんを地じべたにつきたおそうというのです。

けれどもそれよりはやく、このすばしっこい豪傑ごうけつは、そばにあつた礼拝堂れいはいどうにとびこんで、すぐまた上の窓まどからピヨンとひとびでそとへとびだしました。

イノシシのほうは、仕立屋さんのあとを追おつて、なかにとびこみました。ところが、仕立屋さんはそとがわをピヨンピヨンとび

まわつて、イノシシのうしろから扉をとびらピシヤンとしめてしまったのです。

なかでは、イノシシがさかんにあばれまわりましたが、からだがおもしろすぎるうえに、無器用なぶきようものですから、窓からとびだすこともできず、とうとう生けどりにされてしまいました。

ちびの仕立屋さんしたてやは狩人かりゆうどたちをよびよせて、このえものをよく見せてやりました。それから、この豪傑ごうけつは王さまのところへもどつていきました。こうなつては、さすがの王さまも、まえにした約束やくそくを、いやでもおうでもまもらないわけにはいきません。そこで、仕立さんしたてやにじぶんのむすめと国の半分はんぶんをやりました。

もしも王さまが、じぶんのまえに立っている男は、豪傑ごうけつどころか、ただの仕立屋にすぎないことを知ったなら、きつと、もつとくやしがつたことでしょうよ。

そこで、婚礼こんれいはたいそうりっぱに、といつても、みんなからは、あまりよろこばれもせず、とりおこなわれました。こうして、仕立屋したてやさんからひとりの王さまができたのです。

しばらくたってから、わかいお妃きさきさまは、夜中よなかに夫おつとが夢ゆめを見て、こんなねごとをいつているのをききました。

「小僧こぞう、ジャケツをこしらえろ。それから、ズボンをつくらえ、やらないと、ものさしで横よこつつらをひっぱたくぞ。」

これをきいて、お妃きさきさまには、わかい王さまがどんな横町よこちやう

の生まれのひとか、よくわかりました。そこで、あくる朝、おとうさまにこのなやみを話して、

「あのひとは仕立屋したてやにちがいありません。どうかおとうさまの力で、あのひとからあたしをすくってくださいませ。」
と、おねがいました。

王さまはお妃さまきさきをなぐさめて、いいました。

「今夜はおまえの寢室しんしつの扉とびらをあけておきなさい。わしは家来けらいたちをそとに立たせておく。あの男がねこんだら、ふみこんでいて、しばってしまい、船ふねにのせて、遠くへつれていかせよう。」

お妃さまは、これで満足まんぞくしました。ところが、王さまの刀かたな持ちがそばでこの話をのこらずきいていたのですが、この男は

わかい王さまがすきでしたので、このたくらみをわかい王さまにすつかり知らせてしまったのです。

「よし、そんならじやましてやれ。」
と、ちびの仕立屋したてやさんはいいました。

夜になりますと、仕立屋さんはいつもの時間に、お妃さまきさきといっしょにベッドにはいりました。

お妃さまは、仕立屋さんしたてやがぐつつすりねこんだころを見はからつて、そつとおきあがりました。そして、へやの扉とびらをあけてきて、またもとのようにベッドに横になりました。

ちびの仕立屋さんは、ねむっているようなふりをしていただけだったのですから、ふいに、はつきりした声でどなりだしました。

「小僧^{こぞう}、ジャケットをこしらえろ。それから、ズボンをつくろえ。やらないと、ものさしで横つつらをひっぱたくぞ。おれさまはな、ひと打ち^{うち}で七つをやっつけ、大男をふたりも殺^{ころ}したんだ。そればかりか、一^{いっ}角^{かく}獣^{じゆう}をひっぱってきたこともあるし、イノシシを生けどったこともあるんだ。そのおれさまが、なんでそとにいるやつらをこわがるものか。」

仕立屋さんがこういうのをききますと、みんなはすつかりこわくなって、まるで魔王^{まおう}の軍勢^{ぐんせい}に追^おわれてでもいるように、われさきにとにげだしました。そしてそれからは、もうだれひとり、仕立屋さんに手むかおうというものはありませんでした。

こうして、ちびの仕立屋さんは、一^{いっ}生^{しょう}のあいだ、ずうっと

王さままでいました。

(1) いっかくじゆう 一角獣というのは、馬のかたちをした、ひたいに角つが
一本ある、でんせつじょう 伝説上の動物のこと。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

※表題は底本では、「いさましい ちびの仕立屋《したてや》さん」となっています。

入力：sogo

校正：チエコ

2019年12月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

いさましい ちびの仕立屋さん

グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>